

中世盛期農村における非農耕的経済活動

—アフリヘム修道院史料を手がかりとして—

舟橋倫子

中世ベルギー農村状況の解明は、フルフェルストを中心としたヘント学派による一連の研究成果によって飛躍的に進められた。その検討は穀物生産を中心としたものではあったが、農村部で広く営まれていた非農耕的経済活動にも目が向けられ、中世初期から生産物の地域的多様性と市場との結びつきが指摘されている。中世盛期においては人口増加によって急増した食料需要を支える牧畜の重要性が認識され、森林・放牧地・沼沢地の経営にも注意が向けられてきた。しかし、史料的な困難さから 12 世紀の農村における全般的経済状況はいまなお不明な点も多い。本報告で分析対象としたアフリヘム修道院の文書史料は、12 世紀の農村における経済活動に関する情報を豊富に含むにも関わらず、これまで社会・経済史において系統的に取り上げられることがなかった。従って、アフリヘム修道院の 12 世紀文書史料を素材として検討を行うことによって研究の空白を埋め、特に非農耕活動の存在が早くから指摘されている同地域において、修道院領という社会的単位においてこれらの経済活動がいかに展開され、それがどのような意味を持つのかを具体的に検討し、中世盛期における農村状況の解明への一助となることを目指した。

その結果、様々な勢力が拮抗する複雑な状況下で、アフリヘム修道院は多様な立場の人々と積極的に関係を構築することによって、ブラバン公領とフランドル伯領境界地帯に政治的枠組みとは別の相対的に自立的な所領を形成することにある程度成功したことがあきらかとなった。修道院は既存のまとまりを持っていた土地をその社会関係を含めて受容したため、その所領は多面的な構造をもつこととなる。アフリヘムの所領においては基本単位がクルティスに一元化されることはなく、分院、分院領、所領群がそれぞれの境界線を明確に規定されずに、一部重なりあいながらゆるやかに連続しゆくような所領形態が全体として検出できる。それは一元的とはいえないが領域全体としてはあるまとまった空間を形成していた。

その所領において重要な役割を果たしたのが、相当の割合で存在していた非耕地であり、そこでは、地理的諸条件を生かした牧畜や漁労、採石といった様々な非農耕的経済活動が在地の農民達をも労働力として利用しながら、広く展開されていたことが明らかとなった。

この修道院の所領において非耕地がかなりの程度を占めているのには、当時の非耕地をめぐる社会・経済的状況がある。非耕地の生産物の経済的な重要性が益々高まっていたにもかかわらず、これらの土地は権利関係が不明確であり、占有してきた利益に暴力的に固執する領主の家臣達や、領主の管理体制に組み込まれずに自立的な経営を行う在地の農民達の存在もあった。あらゆる社会層にとって、相対的に自立的な存在である修道院によって非耕地の安定的で領域的な管理と経営が実現され、地域の経済活動が活性化されることが必要とされていたのである。

修道院は既存の生産関係を生かしつつ、開発等によって条件を整備することによって多様な経済活動を大規模に進めてゆく。そこで特に重要な役割を果たしたのが、修道院との協力関係によって地域の安定と経済の発展を目指した領邦君主と在地領主の存在であり、多くの流通税免除特権の獲得は、そのような活動が修道院によって広範に流通と結びつけられ、それを領主達が促進していたことを象徴的に示しているといえよう。